

土浦平和の会

ニュースNo. 80 1999年 8月

発行 土浦平和の会

事務局 土浦市神立町2664-2

TEL 831-9122

私の戦争体験と平和運動

寺島美南子

今年もまた暑い暑い夏になりそうです。終戦の年のあの暑い夏私は小学二年生でした。戦況きびしくなった折から海水浴は禁止され、私は砂浜に放置された土管の中で従兄弟たちと遊んでいたように思います。玉音放送は隣のラジオで聞きましたが、昭和天皇のあの独特の口調のみが印象的に残っています。私にとって戦争の記憶は遠い昔のいろあせたセピア色の写真のようです。今にして思えば、三年前に亡くなった母にもっと詳しく聞いておくべきだったと悔やまれてなりません。平和の問題を考えるにあたって、まず、風化しつつある私の戦争体験を思い起こしてみようと思います。

私は昭和十三年三月二十三日に台湾の澎湖島で生まれました。生後十カ月で広東省へ渡り仏山市や広州市に移り住みました。私は六オの時ジフテリアに罹り、父は私の病気を心配しながら当時の仏領インドシナへ出征して行きました。軍医にかかっていたので、ジフテリアと診断されたのが遅く気管切開をして九死に一生を得ました。昭和十九年四月に広州の日本人小学校へあがりました。広州には日本人が大勢住んでおり、小学校は各学年ニクラスあり、台湾人も含まれていました。台湾は日本の領土だったので台湾人は日本人なみに扱われていたのだらうと思います。母によると、私はアチコちゃんという台湾人の女の子と広東語で遊んでいたそうです。当時、海外でも軍国教育は内地とかわらず、上級生達はことあるごとに歴代の天皇の名前と教育勅語を暗唱させられていました。私の将来の希望は従軍看護婦であったように思います。

昭和二十年に入って広州では爆弾テロ事件が多発し非常に物騒になってきました。そこで私達(母と弟と3人)は留守家族の帰国希望者に応募し、二十年一月末女子供達と男の老人だけで日本へ帰ることになりました。広州から九竜まで列車でゆき、九竜から上海まで船で一週間かかりました。軍艦が護衛に付いたのですが何度も空襲にあい、甲板で用を足していた婦人がなくなりました。上海から南京へ行き、それから陸ずたいに朝鮮半島をへて両親の故郷である愛媛県の北条市へ帰ってきました。列車で何泊もしたり、紡績工場の社宅や日本人の公共施設に泊まり泊まりして一カ月もかかりました。列車での旅は窮屈で辛く、気の遠くなるように長かったように記憶しています。都合の悪い景色はなるべく見せないように時々窓のブラインダーが降ろされました。こっそりブラインダーの間から外をのぞくと、広い広い荒野に爆撃にあった列車の残骸がごろごろとところがありました。暖かいところで育った幼い弟はしもやけにかかり、移動の時は泣きながら歩いていました。今ではジェット機で数時間でゆける中国なのに、あの時は辛い大変な旅だったように思います。しかし、まだ戦争中でしたので、戦後の引揚者のような悲惨な目に会わなかったのは幸いでした。裏面に続く

行事ごよみ

7月27 土浦連絡会(1中地区公民館)
7月31 土浦平和の会5周年記念懇親会
8月4 第3回8-15実行委員会(1中地区公)
8月8 ぽっぽの会「すいとんを食べる会」
8月15 8.15市民のつどい(1中地区公)
8月19 平和行進県南実行委(つくば)

終戦記念市民のつどい
に誘い合って参加しよう
と き 8月15日(日)
13:30~16:00
ところ 土浦1中地区公民館